

〔共同研究：インドネシアにおける開発と社会変容〕

翻 訳

古マタラム王統再構成

—ワヌア・トゥンガ第三刻文による—

K u s e n

(訳) 深 見 純 生*

訳 者 序 文

本稿は Kusen, “Raja-raja Mataram kuna dari Sanjaya sampai Balitung: Sebuah rekonstruksi berdasarkan prasasti Wanua Tengah III”, *Berkala Arkeologi*, edisi khusus, tahun XIV, 1994, pp. 82-94 の全訳である。

Berkala Arkeologi はジョクジャカルタのバライ・アルケオロギ Balai Arkeologi (略称バラル Balar) が発行する雑誌であり、通常年2回刊行されるが、その他に本号のような特別号が出ることもある。本号は1994年3月にジョクジャカルタで行われた「インドネシア古代史の新しい資料と解釈の評価セミナー Seminar Evaluasi Data dan Interpretasi Baru Sejarah Indonesia Kuna (Dalam Rangka Purna Bakti Drs. M. M. Soekarto Karto Atmodjo, Yogyakarta, 23-24 Maret 1994)」のペーパー約40点を収めている。なおこのセミナーは長年刻文の解読と研究に携わってきたスカルト・カルト・アトモジョの退職を記念するものとして開かれた。

バライ・アルケオロギはインドネシア教育文化省の考古学調査センター（在ジャカルタ）の地方支部にあたる研究調査機関であり、現在西のメダンから東のジャヤプラまで全国10箇所にある。そのなかでジョクジャカルタのバライ・アルケオロギは歴史も古く、人員も多く、活動も活発である。

著者クセンは当時ジョクジャカルタにあるガジャ・マダ大学文学部考古学科の教員であったが、訳者がジョクジャカルタに滞在した1999年にはすでに物故されていた。

ワヌア・トゥンガ第三刻文は本稿で強調されるとおり、8世紀前半から10世紀初頭までの中部ジャワ古代王統の再構成においてきわめて有用な情報を多数含んでいる。訳者は一読して大変驚かされた。いくつかの意味でジャワの古代刻文のなかで非常に特異な存在だからであり、専門家による一層の検討を期待したい。従来知られていない王が登場する他に少なくとも次のような重要な内容が含まれている。第一に諸王の即位年月日がわかる。第二に王が死去したかあるいは王位を奪われたかが書かれている。従来の刻文ではその刻文が出された時点の王がわかるだけで、その王がいつ即位したか、またいつまで在位したかまったく不明であった。第三に特定の水田のシーマの権利の改廃が述べられている。少なくとも現在のところシーマ特権の剝奪を述べる唯一の刻文であり、ましてやその改廃が繰り返されたことを述べているのはきわめて異例である。本稿はこうした重要性に鑑みてここにクセン論文の翻訳をもってこの刻文を紹介するものである。

王統再構成の従来の説およびシーマ定立刻文に関してはさしあたり訳者の「ジャワ古代史の再構築」『岩波講座世界歴史第6巻』（1999）を参照されたい。ただし訳者はその執筆時にこのワヌア・トゥンガIII刻文の存在を知らなかったため、当該部分は根本的な修正が必要である。また言うまで

*本学文学部

もないことだが、本稿の第3節における再構成の試論には様々な批判がありうるであろう。ここではこの刻文の諸王のあいだにそもそも系譜関係を認めない意見のあることを付け加えるにとどめておきたい (Roy E. Jordaan, *The Sailendras in Central Javanese History*, Universitas Sanata Dharma, Yogyakarta, 1999)。

なお本稿は桃山学院大学の総合研究所共同研究プロジェクト「インドネシアにおける開発と社会変容」の研究成果でありまた訳者に与えられた1999年度海外特別研修の付随的成果である。

古マタラム王統再構成～ワヌア・トゥンガ第三刻文による

ひとつの考古学の新発見が歴史叙述に変化をもたらすことがある。そして、こうした新発見に照らして古代史のすべての時代を書きなおさねばならなくなる可能性はきわめて大きい。(Soekmono 1965: 46)

I 問題提起

古代史の叙述は事実よりも問題や推測を提供することがしばしばである。これは発見されている歴史資料が非常に限られていて、情報が期待通りにはそろわないからである。それゆえ新史料の発見は、既存の歴史再構成をより完全にするのに役立つものとして、歓迎される。これとの関連で上に引用したスクモノの見解は、古代史の分野に携わる者の留意しなければならない方向である。しかしながら、『インドネシア国史第二巻』の編集委員会、具体的には古マタラム諸王の歴史を検討する人々はこの方向を忘れ去ったようである。それは、1992年の第4版まで『インドネシア国史第二巻』(Bambang Sumadio 1992)が、ワヌア・トゥンガIII刻文に記される重要なデータをまったく無視していることから明らかである。この刻文は実に1983年にすでに発見されている。さらに驚かされるのは、この刻文は検討を経た上で、少なくとも、ジョコ・ドゥイヤントとジャファルによって1985年の第4回国史セミナーに、またジョコ・ドゥイヤントによって1986年の第4回考古学研究会に提出されている。なぜこんな事態が生じたのだろうか。

本報告は、『インドネシア国史第二巻』の編集委員会から無視されてきた、ワヌア・トゥンガIII刻文に含まれる歴史的なデータ、とくに古マ

タラムの諸王に関わるものを再び提供するものである。ついで、ワヌア・トゥンガIII刻文に含まれる歴史的価値がいかに高いかを示すために、サンジャヤからバリトゥンまでの諸王の歴史の再構成を提示する。最後に、古マタラムの諸王の歴史を将来書きなおすにあたって、本報告が一つの参考資料となることを期待したい。

II ワヌア・トゥンガIII刻文, シャカ830=西暦908年

ワヌア・トゥンガIII刻文は中部ジャワのトゥマングン県カロラン郡ガンドゥラン村ドゥンロ区の住民が1983年11月頃発見した。2枚の銅板からなり、文字は古代ジャワ文字、言語はサンスクリットをまじえた古代ジャワ語であり、シャカ暦830年(西暦908年)のものである。現在はプランバナンにある、中部ジャワ州歴史考古保存局に収蔵されている(Kusen 1984)。

ローマ字転写はまず私が、ついでブハリが行い、ブハリがこの刻文をワヌア・トゥンガIII刻文と命名した。これまですでに何人かがその内容を利用あるいは言及している。具体的には私自身(Kusen 1984; 1986; 1988; 1989)、ブハリ(Boechari 1986)、ジョコ・ドゥイヤント(Djoko Dwiyanto 1985; 1986)、ハサン・ジャファル(Hasan Djafar 1985)である。

その中心的な内容は、ワヌア・トゥンガにある水田をピカタンにある僧院 *bihara* のシーマ

にするというバリトゥン王の決定である。その背景としてまず、ラケー・パナンカランの746年から、908年にバリトゥン王によってこの刻文が出されるまでの、その水田の由来が述べられる。その内容の概要を箇条書きすると次のようになる。

- 1 刻文はまず、ラヒヤンタ・リ・ムダンの弟ラヒヤンタ・イ・ハラという人物がピカタンに僧院を建立したことについて述べる。
- 2 ラケー・パナンカランは746年10月7日に即位した。彼はワヌア・トゥングの水田を、種籾と共に、ピカタンにある僧院のシーマとして与えた。
- 3 ラケー・パナラバンは784年4月1日に即位した。彼はこの水田の地位を変更しなかった。
- 4 ラケー・ワラク・ディヤ・マナラは803年3月28日に即位した。この王はワヌア・トゥングの水田のシーマの地位を廃止したので、ピカタンの僧院の権利ではなくなった。ラケー・ワラクは死去してサン・ルマー・イ・ケーラーサの呼称を得た。
- 5 ディヤ・グラは827年8月5日に即位した。彼は水田の地位を変えなかった。
- 6 ラケー・ガルン・アナク・サン・ルマー・イ・トゥークは828年1月24日に即位した。829年に彼はその水田をピカタンの僧院に返した。ワヌア・トゥングIII刻文の中にラケー・ガルンの刻文の引用があり、それはかつてシュリー・マハーラージャ・サン・ルマー・イ・ケーラーサによって廃された水田のシーマの地位の回復に関わるものである。この引用部分はジャワ語とサンスクリットの両方で書かれている。ラケー・ガルンは死去した。
- 7 ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥは847年2月22日に即位した。この王はワヌア・トゥングの水田のシーマの地位を廃した。ラケー・ピカタンは死去した。
- 8 ラケー・カユワンギ・ディヤ・ローカパーラは855年5月27日に即位した。彼は水田の地位を変えなかった。ラケー・カユワンギは死去した。
- 9 ディヤ・タグワスは885年2月5日に即位した。彼は水田の地位を変えなかった。彼は王座から追われた。
- 10 ラケー・パヌムワンガン・ディヤ・デーウエンドラは885年9月27日に即位した。この王は水田の地位を変えなかった。彼は王座から追われた。
- 11 ラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラは887年1月27日に即位した。刻文の中で、彼は887年2月24日に王宮を捨てて逃げた(minggat)ので王位が空白になったと書かれている。
- 12 ラケー・ウンカルフマラン・ディヤ・ジュバンは894年11月27日に即位した。彼は水田の地位を変えなかった。ラケー・ウンカルフマランは死去した。
- 13 ラケー・ワトゥクラ・ディヤ・バリトゥンは898年5月23日に即位した。彼のマハーマントリはラクルヤン・イ・ヒノ・シュリー・ダクショッタマである。バリトゥンは904年にジャワのすべての僧院を自由 swatantra にするよう命じた。908年10月1日バリトゥンは彼のマハーマントリと共にワヌア・トゥングの水田をシーマとしてピカタンの僧院に与えた。
- 14 続いて刻文はシーマ定立儀式に関わった役人の名前、僧院側が出すべき贈り物の大きさを述べ、最後に、すでに確立された決定を変更しようとする者への呪いが述べられる。

以上がワヌア・トゥングIII刻文の概要である。なおシャカ暦の西暦への換算はジョコ・ドウィヤントによる (Djoko Dwiyanto 1985)。

刻文の中で長期にわたる諸王のリストが即位の詳細な日付と共に記されていることはまさに、それが本物か、記される内容が正しいか疑念を抱かせるものである。それゆえ、歴史再構成のデータとして利用する前に、まずこの点を検討しなければならない。そのために、同時代の諸刻文と比較してみる。

その時にまず注目されるのは、同じバリトゥ

付録I 古マタラム諸王のリスト (マンティヤシ刻文とワヌア・トゥングIII刻文)

マンティヤシ刻文 (907年)

Rakai Mataram Sang Ratu Sanjaya

Sri Maharaja Rakai Panangkaran

Sri Maharaja Rakai Panunggalan

Sri Maharaja Rakai Warak

Sri Maharaja Rakai Garung

Sri Maharaja Rakai Pikatan

Sri Maharaja Rakai Kayuwangi

Sri Maharaja Rakai Watuhumalangng

Sri Maharaja Rakai Watukura Dyah Balitung

ワヌア・トゥングIII刻文 (908年)

Rahyangta ri Mdang

Rake Panangkaran

(7-10-746~1-4-784)

Rake Panaraban

(1-4-784~28-3-803)

Rake Warak Dyah Manara

(28-3-803~5-8-827)

Dyah Gula

(5-8-827~24-1-828)

Rake Garung

(24-1-828~22-2-847)

Rake Pikatan Dyah Saladu

(22-2-847~27-5-855)

Rake Kayuwangi Dyah Lokapala

(27-5-855~5-2-885)

Dyah Tagwas

(5-2-885~27-9-885)

Rake Panumwangan Dyah Dewendra

(27-9-885~27-1-887)

Rake Gurunwangi Dyah Bhadra

(27-1-887~24-2-887)

Rake Wungkalhumalang Dyah Jbang

(27-11-894~23-5-898)

Rake Watukura Dyah Balitung

(23-5-898~1-10-908)

ン王によって連続して出された、907年のマンティヤシ刻文とこの刻文に見えるマタラム諸王のリストの違いである(付録I参照)。この違いがなぜ生じたのかという重要問題への回答は、サンジャヤからバリトゥンまでのマタラム王統再構成の後に得られるだろう。

ワヌア・トゥングIII刻文に記される情報が正しいかどうか検討するために、まずこの刻文の諸王の名前が他の刻文にも見られるか調べてみよう。以下はその検討結果である。

- 1 ピカタンに寺院を建立した、ラヒヤンタ・リ・ムダンの弟ラヒヤンタ・イ・ハラは、他の刻文には見られない。
- 2 746年に即位したラケー・パナカランは、907年のマンティヤシ刻文のほか、778年のカラサン刻文と792年のアバヤギリウィハーラ刻文にも出てくる。
- 3 784年に即位したラケー・パナラバンは、他の刻文には見えない。しかしながら、ラトゥボコ遺跡の第一楼門付近から、「オム・タキ・フームジャ・スワーハー・パナラブワン・ハニパス om taki humjah swaha panarabwan hanipas」という文字のある金の薄片が見つまっている(Suhamir 1950: 36)。
- 4 803年に即位したラケー・ワラクも907年のマンティヤシ刻文に見える。
- 5 827年に即位したディヤ・グラは他の刻文に見られない。
- 6 828年に即位したラケー・ガルンは、907年のマンティヤシ刻文に述べられ、また819年のガルン刻文にも述べられている。819年の刻文では彼は自らをラカラヤン・イ・ガルンと称し、マハーラージャの称号を帯びて

いない。

- 7 847年に即位したラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの名前は、完全な形では他の刻文に見えない。しかし、ラケー・ピカタンという称号はマンティヤシ刻文、プラオサン・ロル寺院の短い刻文、そして863年のワヌア・トゥンガI刻文に見られる。863年のワヌア・トゥンガI刻文においてラケー・ピカタンの個人名はプ・マヌクである。さらに、ディヤ・サラドゥという名前はプラオサン・ロル寺院の短い刻文に見られるが、その称号はラケー・グルンワンギである。
- 8 855年に即位したラケー・カユワンギの名前は、マンティヤシ刻文に見られるほか、856年のシワグリハI刻文、863年のワヌア・トゥンガI刻文、そして879年のクワク刻文に見られる。
- 9 885年に即位したディヤ・タグワスの名前は、エル・ハンガト刻文（紀年を記す部分は逸失）に見出される。そのエル・ハンガト刻文の中で彼は自らをシュリー・マハーラージャ・ディヤ・タグワス・ジャヤキルティワルダナと称している。
- 10 885年に即位したラケー・パヌムワンガン・ディヤ・デーウェンドラの名前は、完全な形では他の刻文に見られない。しかし、ディヤ・デーウェンドラの名前は890年のポ・ドゥルル刻文でラケー・リムスの称号をともなっている。
- 11 887年に即位したラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラの名前は、完全な形では他の刻文に見られない。しかしながら、ラケー・グルンワンギの称号はプラオサン・ロル寺院の短い刻文に見られ、それはラケー・グルンワンギ・ディヤ・サラドゥとラケー・グルンワンギ・ディヤ・ラヌを記している。ラケー・グルンワンギの名前はさらに887年のムング・アンタン刻文に見られる。
- 12 894年に即位したラケー・ウンカルフマラン・ディヤ・ジュバンの名前は他の刻文に見えない。しかしながら、907年のマンティヤシ刻文と896年のパヌンガラ刻文には

ラケー・ワトゥフマランという名前があり、これはウンカルフマランの同義語である。

- 13 ワヌア・トゥンガIII刻文を發した人物であるラケー・ワトゥクラ・ディヤ・バリトゥンの名前は、他の多くの刻文にも述べられている。たとえば、マンティヤシ刻文、902年のワトゥクラ刻文や905年のポ刻文である。

以上から、ラヒヤンタ・イ・ハラおよびディヤ・グラを除いて、ワヌア・トゥンガIII刻文に述べられる王や人物は他の刻文にも見られることがわかる。このことは、この刻文が本物であってその内容は古マタラムの諸王の歴史を再構成する資料として十分信用しうることの根拠とみなすことができる。

III 古マタラム諸王の歴史の再構成、サンジャヤからバリトゥンまで

ワヌア・トゥンガIII刻文は諸王の即位の時点を描くだけで、その治世がいつ終わったかは必ずしも明瞭でない。とはいえ、ある王の治世は次の王の即位の時またはそれ以前に終わったと解することができる。後に王の治世の期間を計算するときこの仮定を使うことになる。

ここでは、ワヌア・トゥンガIII刻文およびその他の刻文に出てくる諸王の間の関係を検討する。便宜的に、古いほうから順につまりサンジャヤ、ラケー・パナンカランから検討する。

1 サンジャヤ

マンティヤシ刻文によれば、ラケー・パナンカランの前に支配していた王はサンジャヤである。この王は732年のチャンガル碑文を發している。サンジャヤは717年に支配し始めたと推定されている。この推定は、ダクショーッタマがその二つの刻文でのみ用いているサンジャヤ紀元の計算に基づくものである (Bambang Sumadio 1992: 100)。この推定が正しいならば、サンジャヤは717年から、746年ないしそれ以前まで統治していたことになる。彼の統治の終わりは、サンジャヤの次に統治したラケー・パナンカランの治世の初めを根拠にしている。

ワヌア・トゥンガⅢ刻文はサンジャヤの名前を述べていない。しかしながら、ラヒヤンタ・イ・ハラの子として述べられているラヒヤンタ・リ・ムダンがサンジャヤであるのは確実である。シワ教徒の子とは違ってラヒヤンタ・イ・ハラは仏教を奉じる。このことはピカタンに僧院を建立する行為から読み取ることができる。このサンジャヤの子が奉じた宗教は、ラケー・パナンカランのそれと同じである。それゆえ、ラケー・パナンカランがピカタンにある僧院のシーマとして、ワヌア・トゥンガで水田を与えたとしても驚くにあたらない。ましてや、その僧院の建立者は自身の叔父なのである。

2 ラケー・パナンカラン

ワヌア・トゥンガⅢ刻文によれば、ラケー・パナンカランは746年10月7日に即位し、そして784年4月1日またはそれ以前まで王座にあったと推定され、したがって、その治世は約38年におよぶ。この王は778年のカラサン刻文、782年のクルラク刻文、そして792年のラトゥボコまたはアバヤギリウィハーラ刻文を発している。カラサン刻文とクルラク刻文は、彼の治世中のことゆえ、問題がないのに対して、アバヤギリウィハーラ刻文は王位を退いてから約8年後に出されたことを問題にしなければならない。

この問題は以下のような計算によって説明することができる。彼が746年に20～25才で即位したとすれば、生まれたのは721～726年であるので、784年には58～63才である。ワヌア・トゥンガⅢ刻文の中でラケー・パナンカランが死去したとは述べられていないことをふまえると、約38年の治世の後、老年に達して王位から退き僧院生活を送ったという推測には十分根拠がある。この推測は、792年にラケー・パナンカランが、ラトゥボコの丘にアバヤギリウィハーラを建立したことを記念する刻文を発したという事実によって補強される。この僧院は自らが住むために使われた可能性が大きい。この刻文を発したとき彼は66～71才であった。

3 ラケー・パナラバン

ラケー・パナンカランの次の王は、マンティヤシ刻文によればラケー・パヌンガランであり、他方ワヌア・トゥンガⅢ刻文によればラケー・パナラバンである。両刻文ともにバリトゥン王によって出されたことをふまえると、ラケー・パヌンガランはラケー・パナラバンと同じであると確認できる。異なる表現がされているのはおそらく、この人物がかつてパヌンガランにおいてまたパナラバンにおいてラケーの地位にあったからであろう。

ラケー・パナラバンは784年4月1日に即位し、803年3月28日またはそれ以前に王位を引いた。したがって治世は約19年である。その治世が長いことは政治的に安定していたというイメージを与え、また彼が即位したとき先王は退位していたことから、王位継承は適正に行われた。継承が順当であったことは、ラケー・パナラバンが正当な王位継承者であったことを示している。とすると、ラケー・パナラバンはラケー・パナンカランの子供であったという推定には十分な根拠がある。

ラトゥボコの正面楼門の近くで「オム・タキ・フームジャ・スワーハー・パナラブワン・ハニパス」という文字のある金の薄片が見つまっている (Suhmir 1950: 36) ことに注意する必要がある。「オムタキフームジャスワーハー」は明かにマントラであり、他方「パナラブワン・ハニパス」は、「パナラブワンが保存する」という意味に解しうる(ハニパスはティパス＝「保存する」からくる)。パナラブワンがラケー・パナラバンと同じと解釈しうるなら、楼門の近くに金の薄片を保存したのはラケー・パナラバンである。この推測が正しいなら、ラケー・パナンカランがアバヤギリウィハーラを建立したとき、ラケー・パナラバンは正面楼門の建設を手助けたことになる。このことは、ラケー・パナラバンがラケー・パナンカランの子供であるという推測をさらに強化するものである。

もしラケー・パナラバンが784年におよそ25才で即位したとするなら、彼は759年頃の生まれで、44才くらいで退位したことになる。ワヌア・

トゥンガIII刻文が彼の死去を述べていないことから、王位を引いたと推測される。比較的若くして退位した理由については確かなことはわからない。

4 ラケー・ワラク・ディヤ・マナラ

ラケー・ワラクという名前は、ワヌア・トゥンガIII刻文以外にはマンティヤシ刻文に見えるだけで、それも個人名は欠けている。この王の治世は803年3月28日に始まり、827年8月5日ないしそれ以前に死去するまでであった。したがってその長さは約24年であった。彼は死後「サン・ルマー・イ・ケーラーサ」の呼び名を得た。ケーラーサないしカイラサはシワ神の住まう山の名前である (Liebert 1976: 115-116) ので、彼はおそらくシワ教徒であった。彼の治世が長いことは政治的に安定的なイメージを与えるもので、彼は正当に王位を世襲したと推測される。とすると、ラケー・ワラクはラケー・パナラバンの子供である可能性が大きい。

ラケー・ワラク・ディヤ・マナラはおおよそ25才で即位し、778年頃の生まれで、49才くらいで死去した。この推測は、ラケー・ワラクをラケー・パナラバンの子供とするのに、時間順序の点で適正である。

ラケー・ワラクの治世 (803~827年) に、824年のカラントゥンガ刻文ないしカユムウンガン刻文がある。これはサンスクリットと古代ジャワ語の二つの言語で書かれている。サンスクリットの部分はおもに、サマラトゥンガおよびその子でスリマドウェヌワナを建立したプラモダワルダニーについて述べる。古代ジャワ語の部分は、その聖なる建物のシーマとしていくつかの場所で水田を与えたラカラヤン・パタパーン・プ・パラル夫妻について述べる (Casparis 1950)。

今日専門家たちは、サマラトゥンガはナーランダー刻文 (850年頃) に言うサマラーグラウィーラと同一人物という説に同意する傾向にある。この刻文によると、サマラーグラウィーラは、ワンサ・シャイレンドラの宝石でありシュリー・ウィラワイリマタナという称号をもつジャ

ワの王の子供である。サマラーグラウィーラは、ゾーマワンサのダルマセートゥの子供のターラーとの結婚によって、シュリーヴィジャヤで王になったバーラプトラという名前の子供をもつ。シュリー・ウィラワイリマタナという称号をもつ人物はラケー・パナカランであるので、サマラーグラウィーラつまりサマラトゥンガはラケー・パナカランの子供である (Bambang Sumadio 1992: 112-113)。

サマラトゥンガがラケー・パナカランの子供であることをいっそう確かなものにするために、おそらく年代の計算が必要である。カユムウンガン刻文によれば、サマラトゥンガは824年にはすでにプラモダワルダニーという子供がおり、この子はまだ結婚していないがすでに成人していると推測される。仮に当時プラモダワルダニーが18才であったとし (806年頃の生まれ)、そしてサマラトゥンガが25才くらいで子供をもうけたとすると、サマラトゥンガの生まれたのは781年頃となる。ラケー・パナカランは781年に55~60才くらいでまだ王位にあり、したがって子供をもつことができる。ただし妻はきつとずっと若かった。実は、シュリー・ウィラワイリマタナという称号を持つのがラケー・パナカランだけでなく、ラケー・パナラバンも同様であったとすると、時間順序の点で、サマラトゥンガはラケー・パナラバンの子供とするほうがふさわしい。

いま問題なのは、サマラトゥンガとラケー・ワラクの関係如何である。奉じる宗教の点から見ると、サマラトゥンガは仏教であり、ラケー・ワラクはシワ教である。名前は明らかに同一人のものではない。それゆえ、他の可能性をさぐらねばならない。これとの関連で、私はかつて、サマラトゥンガはジャワで統治していたことはない、つまり古マタラムの王ではないことを明かにした。以下がその根拠である。スリマドウェヌワナを建立したとき、聖なる建物の必要のために土地を与えたのは彼またはその子プラモダワルダニーではなくて、ラクルヤン・プ・パラル夫妻であった。このことは、サマラトゥンガはジャワにおける土地に対する権利をもた

ないこと、つまり王ではないことを意味する。それゆえ彼は、当該地の支配者であるプ・パラル夫妻に土地を提供して援助してくれるよう求めた。彼が自ら行ったのは建設資金の提供であった。プ・パラルはおそらく、スマトラの出身で、彼の一族であり、婚姻によってラカラヤン・パタパーンの地位を獲得した人物である。プ・パラルに関するこの推測は、古ムラユ語のサン・ヒャン・ウィンタン刻文を発したからというだけでなく、その刻文（カユムウンガン刻文とサンヒャン・ウィンタン刻文）ではつねに妻を述べていることから生じたものである。サマラトゥンガはジャワを統治したことがないという推定は、その名前がカユムウンガン刻文の中で述べられるだけで、マンティヤシ刻文とワヌア・トゥンガIII刻文のいずれの諸王のリストにも含まれないという事実によって補強される（Kusen 1988: 7）。かくして、サマラトゥンガとプラモーダワルダニーがパタパーン地域で行ったことは、ナーランダーに僧院を建立するときにはバーラプトラデーワが行ったことに似ている。周知のように、ナーランダー刻文（850年頃）によれば、バーラプトラデーワはナーランダーに僧院を立てたが、その土地は、当該地の王であるデーワパーラデーワによって提供された。

ラカラヤン・パタパーン・プ・パラルがパタパーンにおける支配権を結婚によって得たことはすでに述べた。妻の親はおそらく、807年のムンドゥアン刻文に見えるラカイ・パタパーン・プ・マヌクである。プ・パラルがゴンドスリ刻文を発したとき、義父はすでに死んでおり、したがってその名前は述べられず、述べられているのは母、義母、年下のキョウダイ、義キョウダイ、叔父、そして子供たちである（ゴンドスリ刻文の内容については Casparis 1950: 61-62; Machi Suhadi dan M.M. Soekarto 1986: 9-10）。

上の再構成が正しいとすれば、サマラトゥンガは、年齢的には同じだとしてもラケー・ワラクの叔父ということになる。かれらの血縁関係を見ると、なぜサマラトゥンガはラケー・ワラクではなくプ・パラルに援助を求めたのかが問

題になる。一つの可能性は、彼らの関係が悪かったことである。関係悪化は、ラケー・ワラクの決定がピカタンの僧院のシーマとしてのワヌア・トゥンガの水田の地位を奪ったために生じたのかもしれない。サマラトゥンガは仏教徒として、またピカタンの僧院にかつてその水田を与えたラケー・パナンカランの息子として、ラケー・ワラクの決定はけっして愉快ではなかった。

以上の再構成は、サマラトゥンガはジャワで統治したことはなく、スマトラで統治した可能性が大きいことを示している。この人物がスマトラ（シュリーヴィジャヤ）で統治できたのは、ダルマセートウの子ターラーとの結婚によるほか、またおそらく母がスマトラの出身だからである。母がスマトラの出身であることは、当時ラケー・パナンカランがシュリーヴィジャヤの領域をすでに征服したことを示している775年のリゴール碑文の内容と関連づけることができる。その後ラケー・パナンカランはその地から、781年頃にサマラトゥンガを生むことになる一人の妻を得た。

5 ディヤ・グラ

ワヌア・トゥンガIII刻文によれば、ラケー・ワラクの死後王位についたのはディヤ・グラである。この王は約6ヵ月（827年8月5日～828年1月24日）在位しただけである。ワヌア・トゥンガIII刻文がディヤ・グラを述べる唯一の史料であるので、他の参照史料によりその出自の問題を解決することはできない。とはいえ、彼が実は誰なのかを明らかにするのにワヌア・トゥンガIII刻文に手がかりがある。それは、1.彼はラケー・ワラクの死後に即位したこと、2.彼はまだラケーの称号を持たないこと、3.ワヌア・トゥンガの水田の地位に対する政策はラケー・ワラクと同じであること。この3点に基づいて、ディヤ・グラはラケー・ワラクの皇太子であって、父が死んだときまだ若くて、自身の支配領域を持たなかったと推測できる（Kusen 1988: 8）。

6 ラケー・ガルン

ラケー・ガルンは828年1月24日に即位し、847年2月22日またはそれ以前に死ぬまで王位にあった。したがって彼の治世は約19年におよぶ。前王の在位が非常に短かったことを見ると、ラケー・ガルンは権力奪取による即位と推測される。正当な即位方法ではなかったけれども、十分長期にわたって在位することができただけでなく、死ぬまで王位にあった。このことは彼の立場が十分強力だったことを示している。

そもそもラケー・ガルンは何者で、先代諸王とはどのような関係であろうか。ワヌア・トゥングIII刻文によれば、ラケー・ガルンはサン・ルマ・イ・トゥークの子供と述べられている。サン・ルマ・イ・トゥークが何者かは、他の史料がないので不明である。とはいえ、ラケー・ガルンが強力な立場にあること、また即位後約一年でラケー・ワラクにより剝奪されたワヌア・トゥングの水田のシーマの地位を回復したことをみると、その親はラケー・ワラクの前に王位にあった王つまりラケー・パナラバンの可能性が大きい。

以上の推定を補強するために時間順序を計算してみる必要がある。ラケー・ガルンは王になる前の819年にすでに刻文を発している (OV 1920: 136)。この819年に彼が25才くらいであったとすると、生まれたのは794年頃である。794年にラケー・パナラバンは35才くらいであるから、年齢の点から見て、ラケー・パナラバンはラケー・ガルンの父たるにふさわしい。

上の推定が正しいとすると、ラケー・ガルンはラケー・ワラクの弟であり、さらにディヤ・グラの叔父にあたる。かくして、ラケー・ガルンは、王位を即位当時まだ若かった自分の甥から奪ったことになる。

ラケー・ガルンの治世中に842年のトル・イ・トプサン刻文があり、シュリー・カフルンナンという名前を述べている (Casparis 1950: 86-87)。ブハリによれば、シュリー・カフルンナンは皇太后の意味である (Boechari 1982: 17-18)。かくして、シュリー・カフルンナンはラケー・ガルンの母、つまりラケー・パナラバンの

未亡人である。シュリー・カフルンナンが794年頃、18才くらいでラケー・ガルンを生んだとすれば、842年に66才くらい、生まれたのは776年頃となる。シュリー・カフルンナンの生年に関するこの推測は、彼女はラケー・ワラクの母ではないという示唆を与える。というのは、先の計算によれば、ラケー・ワラクは778年頃の生まれである。かくして、ラケー・ガルンは、ラケー・ワラクの異母弟である。

シュリー・カフルンナンの名前はプラオサン・ロール寺院で見つかった短い刻文に記されている。彼女がラケー・ガルンの母であるなら、プラオサン・ロール寺院の複数の短い刻文に記されるシュリー・マハーラージャは (シュリー・マハーラージャ・ラケー・ピカタンと書いてある場合を除いて)、ラケー・ピカタンではなくてラケー・ガルンである。この推測はワヌア・トゥングIII刻文中のデータにより補強される。すでに述べたように、ワヌア・トゥングIII刻文の中に、829年のラケー・ガルンの刻文からの引用がある。その引用の中に、ワヌア・トゥングの水田をピカタンの僧院に戻したときにラケー・ガルンの伴をした一人の役人としてシリカン・プ・スールヤの名前がある。他方プラオサン・ロール寺院では副祀堂第一列第15番と第16番からサン・シリカン・プ・スールヤの短い刻文が出たという事実がある。ワヌア・トゥングIII刻文とプラオサン・ロールの短い刻文のシリカン・プ・スールヤが同一人物ならば、上の推測は十分強固なものになる (Kusen 1988: 10)。

7 ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥ

ラケー・ガルンの死後王位についたのはラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥである。この王は847年2月22日に即位し、855年5月27日またはそれ以前に死ぬまで王位にあった。したがってその治世は約8年である。

ワヌア・トゥングの水田に対するラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの政策はラケー・ガルンとは異なっていた。ラケー・ワラクによって剝奪された水田のシーマの地位をラケー・ガルンが回復したのに対して、ラケー・ピカタン

は再びそれを剥奪した。この政策の違いはおそらく、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの先代諸王との関係と関連がある。それゆえ以下に、史料に基づいてラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの出自を探ってみる。

ディヤ・サラドゥの名前はワヌア・トゥンガⅢ刻文のほか、プラオサン・ロール寺院の2基の脇ストゥーパに書かれている。それは「アヌモーダ・ラケー・グルンワング・ディヤ・サラドゥー・アストゥーパ・シュリー・マハーラージャ・ラケー・ピカタン」という刻文である (Casparis 1958: 11)。サラドゥの語末の u は、プラオサン・ロールでは長母音、ワヌア・トゥンガⅢ刻文では短母音であり、称号はプラオサン・ロールではラケー・グルンワング、ワヌア・トゥンガⅢ刻文ではラケー・ピカタンという違いがあるけれども、同一人物と推測される。プラオサン・ロールの建立が続いていたときディヤ・サラドゥはまだラケー・グルンワングの地位にあって、2基の脇ストゥーパ (第2列第14番と第15番) を建立する貢献をした。ラケー・ガルンが死んだとき、ディヤ・サラドゥは王位に上ることができ、ラケー職域 daerah kerakean はピカタンに移った。彼は即位の後、まだラケー・グルンワングであったときに建立した2基の脇ストゥーパに新しい称号と地位を付け加える必要があると思った (Kusen 1986: 408; 1988: 11)。

プラオサン・ロール寺院ではラケー・グルンワング・ディヤ・サラドゥの他に、ラケー・グルンワング・ディヤ・ラヌという名前も見ついている。ディヤ・ラヌはディヤ・サラドゥの父で、プラオサン・ロールに副祀堂を建立した後に引退し、グルンワングにおける権力を子供に譲ったと推測される。ラケー・グルンワングの地位についてのディヤ・サラドゥは後に、父の地位を相続したときにはまだ終わっていなかったプラオサン・ロール寺院の建立に参加した。

つぎに、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの、ワヌア・トゥンガの水田のシーマの地位を再び剥奪するという決定は、彼がラケー・ワラクと近い関係にあった、おそらく女婿であったという示唆を与える。ラケー・ピカタン・デ

イヤ・サラドゥは時間順序の点でももちろんラケー・ワラクの女婿たりうる。これは以下のような推定から得られる。ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥが死去した855年当時、彼の年少の子供つまりラケー・カユワング・ディヤ・ローカパーラはすでに成年に達していた。仮に、そのときディヤ・ローカパーラが25才くらいであり、ディヤ・ローカパーラが生まれたときディヤ・サラドゥが25才くらいであったとするなら、ディヤ・サラドゥは805年頃の生まれである。805年にラケー・ワラクは27才くらいである。かくして年齢の点からは、ディヤ・サラドゥはラケー・ワラクの女婿たるにふさわしい。ディヤ・サラドゥの妻はディヤ・グラの妹または姉である。

ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥ治世中の850年にトゥラン・アイル刻文が出ている。それはラケー・パタパーン・プ・マヌクが発したものである。プ・マヌクの名前はこの刻文のほか、807年のムンドゥアン刻文と863年のワヌア・トゥンガⅠ刻文にも述べられている。プ・マヌクはトゥラン・アイル刻文の場合と同様、ムンドゥアン刻文においてもラケー・パタパーンの地位にあり、これに対してワヌア・トゥンガⅠ刻文ではラケー・ピカタンである。時間差から考えて、ムンドゥアン刻文のプ・マヌクはトゥラン・アイル刻文のプ・マヌクとは明かに別人である。いわんや、この両者の間に、パタパーンの支配者としてプ・パラルの名前が入り込むのである。逆に、トゥラン・アイル刻文とワヌア・トゥンガⅠ刻文のプ・マヌクは、一方はラケー・パタパーン、他方はラケー・ピカタンと称号が異なるとはいえ、おそらく同一人物である。

以上に基づいて、850年のトゥラン・アイル刻文に述べられるラケー・パタパーン・プ・マヌクあるいは863年のワヌア・トゥンガⅠ刻文の中にいうラケー・ピカタンは、プ・パラルの子供であって、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの子供と結婚したと推定される。以下はこの推定の説明である。ゴンドスリ (サン・ヒャン・ウィントン) 刻文のなかで、プ・パラルには5

人の子供があると述べられている。長子が後にラケー・パタパーンの父の地位を継ぎ、祖父と同じプ・マヌクに改名した。プ・マヌクはラケー・パタパーンになる以前に、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの娘と結婚していた。彼女はディヤ・ローカパーラの姉の可能性が大きい。850年にプ・マヌクの年齢は25くらいと推定され、したがって彼は825年頃の生まれである。この生年推定は、824年のカユムウガン(カラントゥンガ)刻文が、プ・パラル夫妻はすでに子供をもつとは述べていないことと適合する。855年に義父が死去したとき、ピカタン地域は首長が不在となり、そこでプ・マヌクが義父に代わるラケー・ピカタンになった。ラケー・ピカタンの地位は、彼がワヌア・トゥンガI刻文を発する863年まで続いている。この刻文が出されたとき、義弟のラケー・カユワンギ・ディヤ・ローカパーラが王であった。

ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの出自と同時代の人物との関係を検討したが、彼がなぜラケー・ガルンに代わって王位につくことができたのかをさらに問題にしなければならない。この問題の直接的な説明はまだ見つかっていない。しかしながら、正当な継承者からの篡奪によって王位につくことができたという可能性がある。この推測は、856年のシワグリハ刻文のなかで、ラケー・カユワンギ・ディヤ・ローカパーラが即位する前に戦争のあったことが暗示されている(Casparis 1956: 316-319)ことから生じる。この戦争はおそらくラケー・ガルンの子孫とラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの間の、ディヤ・サラドゥの王位篡奪に端を発する積年の対立の結果である。855年にラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥが死去したのはおそらくこの戦争のためである。

以上の再構成はカスパリスのものと異なる。カスパリスによれば、ラケー・ピカタン(シワグリハ刻文ではジャティニングラトと呼ばれる)は王位を退いた。この見解は「ウパラタ uparata」という語の解釈に基づいており、カスパリスはこの語を身を引くという意味に解する(Casparis 1956: 288)。ブハリはカスパリスと

は意見を異にし、死去するという意味に解する(Boechari tt.: v. 33; Bambang Sumadio 1992)。この問題ではたぶんブハリの意見が正しい。というのも、ワヌア・トゥンガIII刻文のなかで、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥはラケー・カユワンギが即位する前に死んだことが明記されている。

8 ラケー・カユワンギ・ディヤ・ローカパーラ

ラケー・カユワンギは、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥ死後の855年5月27日に即位した。彼は885年2月5日またはそれ以前に死去するまで王位にあった。かくして彼の治世は約30年におよぶ。

ラケー・カユワンギ・ディヤ・ローカパーラはラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥの息子に同定される(Bambang Sumadio 1992: 127-128)。このことは明らかな事実なので問題にする必要はない。またシワグリハ刻文の中のワラプテラの語をナーランダー刻文に言うバーラプトラデーワに同定すること、そして、シャイレンドラ王朝のバーラプトラデーワとラケー・カユワンギおよびラケー・ピカタンとの間に戦争があったとすることに関するカスパリスの見解は、もはや説明する必要はない。というのも、上に提示した再構成から、バーラプトラデーワはジャワで統治したことがないことは明かだからである。取り上げるべき問題は、ラケー・カユワンギと同時代のラカイ・ワライン・プ・クンバヨーニの位置づけである。

ラカイ・ワライン・プ・クンバヨーニはいくつかの刻文に述べられているが、その出自および古マタラム諸王との関係はいまだ明らかでない。863年のペレン(ウキラン)刻文では、彼はサン・ラトゥ・イ・ハルの曾孫(または玄孫, cicit)と自称している。ブハリによると、サン・ラトゥ・イ・ハルはラカイ・マタラム・サン・ラトゥ・サンジャヤの弟である可能性が大きい(Bambang Sumadio 1992: 131-132)。ここで問題になるのは、サン・ラトゥ・イ・ハルは、ワヌア・トゥンガIII刻文の中の、ラヒヤンタ・

リ・ムダンの弟と述べられているラヒヤンタ・イ・ハラと同一人物かどうかである。もっと明瞭な手がかりが手に入るまで、これは答えの出ない問題である。ラケー・ワラインの位置づけにおけるカスパリスとブハリの間の見解の相違もまた同様に、その問題を解明しうる新しい材料がない限り解決できない。よく知られているように、ラケー・ワラインは引退後のラケー・ピカタンだとカスパリスは推測する (Casparis 1956: 289-294)。他方ブハリによれば、ラケー・ワラインはまさしくシワグリハ刻文に述べられているラケー・ピカタンおよびラケー・カユワンギの敵である (Boechari tt.: v.38)。将来ブハリ説が正しいと証明されたなら、ラケー・ワラインはまさしく、ラケー・ピカタンによって王座への権利を奪われたラケー・ガルンの子供ということになるのであろうか。

9 ディヤ・タグワス

ワヌア・トゥンガIII刻文によればディア・タグワスは、ラケー・カユワンギ死後の885年2月5日に即位した。その治世は885年9月27日またはそれ以前まで続いた。したがって、わずか8ヵ月ほどである。ディア・タグワスは王座から追われた。彼はラケー・カユワンギの死後即位したことまたまだラケー称号を持たないことからすると、ラケー・カユワンギの子供であるが、父が死んだ時にはまだ成年に達していなかったと推測される。

ディア・タグワスの名前はワヌア・トゥンガIII刻文のほか、エル・ハンガト刻文にも述べられている。そのエル・ハンガト刻文では彼はシュリー・マハーラージャ・ディア・タグワス・ジャヤキルティワルダナを自称している (OJO: CIV)。この刻文の紀年を記す部分が未発見なため、いつ発布された刻文かわからないのは残念なことである。ジョーンズの推測では888年ころのものである (Jones 1984: 19)。ジョーンズの推測が正しいとすると、ディア・タグワスは王位を追われた後も、エル・ハンガト刻文の発布によって王のごとき態度を取っていることになる。ジョーンズの推測が間違っていたとすると、

エル・ハンガト刻文は885年2月5日～9月27日の間に発布されたことになる。

注目されるのは、エル・ハンガト刻文の中で、4マサの贈り物を得たグル・ヒャン・イ・ケーラーサの存在が述べられていることである。これは、ラケー・ワラク・ディヤ・マナラの死後の呼称サン・ルマ・イ・ケーラーサを思い起こさせる。ワヌア・トゥンガIII刻文に言うケーラーサがエル・ハンガト刻文のそれと同一であるとすると、ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥ (ディヤ・タグワスの祖父) がラケー・ワラクの女婿であるとする推測が一層確かなものになる (Kusen 1988: 15)。

10 ラケー・パヌムワンガン・ディヤ・デーウェンドラ

ワヌア・トゥンガIII刻文によれば、ディア・タグワスが王位を追われた後に即位したのはラケー・パヌムワンガン・ディヤ・デーウェンドラである。この王は885年9月27日に即位し、887年1月27日またはそれ以前に王位を追われた。かくしてその在位は約1年4ヵ月であった。

ディア・デーウェンドラはディア・タグワスが王位から追われた後に即位していることから、まさしくディア・デーウェンドラがディア・タグワスから権力を奪取したことは確かであろう。注目されるのは、ディア・デーウェンドラは王位を追われた後も、890年のポ・ドゥルル刻文を発し、そして自身をラケー・リムス・ディア・デーウェンドラと称していることである (Jones 1984: 197-198)。ディア・デーウェンドラの宮廷のパヌムワンガンからリムスへの移動はおそらく、パヌムワンガンにあった宮廷は敵に占領されたことがあるので住むのに適さないと判断されたからであろう。

ディア・デーウェンドラがそもそも何者であり、それまでの支配者とのような関係にあるのかは、それを明らかにしうる資料がないので、確かなところは不明である。彼はおそらく、王位継承の線をラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥによって絶ち切られたラケー・ガルンの子孫、あるいはまさしく、まだ非常に若い異母

弟と比べて王位を継承するのにふさわしいと思われたディヤ・タグワスその人の異母兄であろう。

11 ラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラ
ラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラは、ラケー・パナムワンガン・ディヤ・デーウェーンドラが王位を追われた直後の887年1月27日に即位した。ワヌア・トゥンガIII刻文の中では述べられていないが、ディヤ・デーウェーンドラの手から権力を奪ったのがこのディヤ・バドラであるのは明かである。しかしながら、即位後28日にしてディヤ・バドラは王宮から逃げ出さねばならなかった(即位は887年1月27日、逃亡は2月24日)。ディヤ・バドラが王宮から逃げ出した後、王国は統治者がいなかった('... anayaka ta ikanang rat rikang kala...')。

非常に注目されるのは、在位が非常に短いにもかかわらず、ラケー・グルンワンギが887年2月9日のムング・アンタン刻文を出しえたことである(Bambang Sumadio 1992: 134; OJO XVIII)。この刻文を発したことは、自分の地位を強化するための政治的措置であっただろう。しかしそれには成功しなかったようである。

ラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラの先代諸王との関係如何は、ラケー・グルンワンギの地位を手がかりに推測するしかない。ディヤ・バドラの出自には、とくにラケー・グルンワンギ・ディヤ・サラドゥ(ラケー・ピカタン・ディヤ・サラドゥ)と特別な関わりがあったはずである。おそらくディヤ・サラドゥの子、あるいは孫かもしれない。

12 ラケー・ウンカルフマラン・ディヤ・ジュバン

ラケー・グルンワンギ・ディヤ・バドラが887年2月24日に王宮から去ったのち、王座は7年間空白であった。この空位時代はラケー・ウンカルフマランが894年11月27日に即位して終わった。この新しい王は898年5月23日またはそれ以前に死去するまで王位にあった。

907年のマンティヤシ刻文にはラケー・ウン

カルフマランの名前は含まれていない。記されているのはラケー・ワトゥフマランである。ウンカルとワトゥは同義語であるので、ラケー・ウンカルフマランはラケー・ワトゥフマランと同一人物である。ラケー・ワトゥフマランはマンティヤシ刻文のほかに、896年のパヌンガラ刻文の中でハジの称号をもって述べられている(Bambang Sumadio 1992: 135)。

この人物の先代諸王との関係またどのようにして王位を得たのかは不明である。とはいえ、彼は先代諸王の誰かと家族関係を持っていたであろう。

13 ラケー・ワトゥクラ・ディヤ・バリトゥン
ワヌア・トゥンガIII刻文によれば、ラケー・ウンカルフマランの死後、王位に昇ったのはラケー・ワトゥクラ・ディヤ・バリトゥンであった。この王は898年5月23日に即位した。904年にバリトゥンはジャワのすべてのサンヒャン・ダルマ・ビハラが自由 *swatantra* となるとの命令を下した。続いて、908年10月1日にバリトゥンは、ワヌア・トゥンガの水田をピカタンの僧院のシーマに戻した。

以上述べたことのほかに、ワヌア・トゥンガIII刻文には非常に注目されることがらがある。すなわちラケー・ガルンの刻文がサンスクリットと古代ジャワ語で引用されている。この引用されているラケー・ガルンの刻文の中心的な内容は、ラカイ・ワラクによって剝奪されたワヌア・トゥンガの水田の地位を回復するというラケー・ガルンの決定である。このことはおそらく、バリトゥンがラケー・ガルンと特別な関係にあったことを示唆するものである。

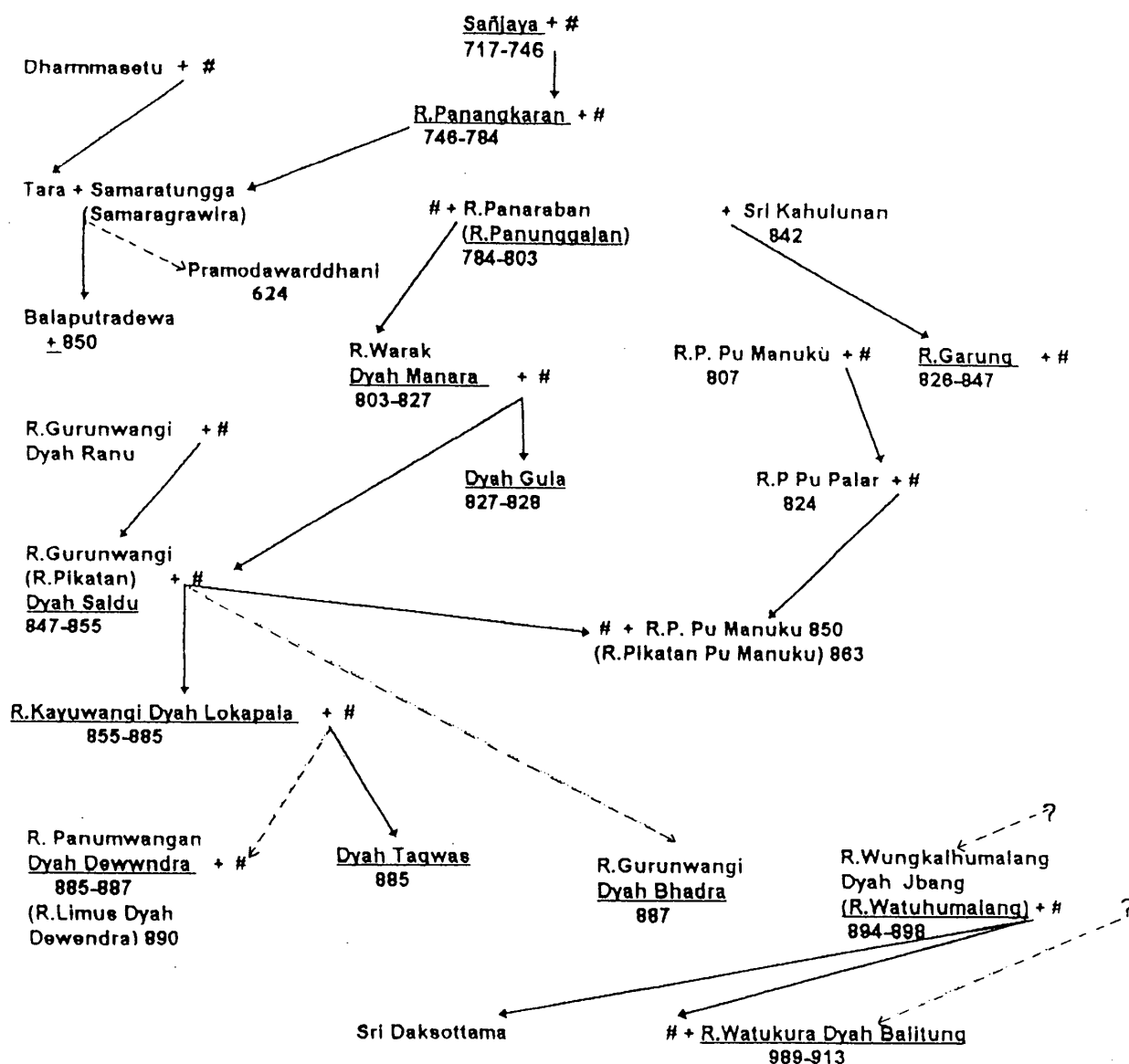
IV 結 論

以上の検討から次の結論がえられる。

1 907年のマンティヤシ刻文の王のリストと908年のワヌア・トゥンガIII刻文中のそれとの違いは、刻文が出された背景の違いによる。

マンティヤシ刻文は正当な王位継承者としての自分を正統化するために出されたのであり、したがって王国の全領域に十分な支配権を持つ

付録II サンジャヤからバリトゥンまで古マタラム諸王の関係の再構成



凡例

- + 婚姻 ———> 親子 (強い推定)
- # 女性 - - - - -> 親子 (弱い推定)

た王だけがその中に述べられた。ディヤ・グラ、ディヤ・タグラス、ディヤ・デーウェンドラ、ディヤ・バドラがリストからはずされたのは、これらが王国の領域に十分な主権を有しなかったからである。このことは、彼らが王位から追われたがゆえの在位期間の短さから見ることができる。

ワヌア・トゥンガIII刻文はワヌア・トゥンガの水田の地位の変化との関連で出されたもので、

したがって、水田の地位の変化に関わりのあった支配者すべてがリストに含まれた。サンジャヤの名前が述べられないのは、ワヌア・トゥンガの水田の話がラケー・パナンカランの時代に始まるからである。

2 ワヌア・トゥンガIII刻文は実に非常に重要な歴史の証拠であるので、古マタラム諸王の歴史の再構成において考慮に入れなければならない。

ワヌア・トゥンガIII刻文の内容から引き出すことができる一つの重要事は、古マタラム諸王の交代がいつも円滑だったわけではないことである。王位の奪取がしばしばである。再構成の結果から、王位の奪取はサンジャヤの子孫の間で行われていること、つまりシャイレンドラ朝とサンジャヤ朝の間の対立ゆえに起こったのではないことがわかる。

参 照 文 献

- Bambang Sumadio (ed.) 1977. *Sejarah Nasional Indonesia II*, Jakarta, Balai Pustaka.
- ___ (ed.) 1992. *Sejarah Nasional Indonesia II*, edisi ke-4, Jakarta, Balai Pustaka.
- Boechari 1965. "Epigraphy and Indonesian Historiography", dalam Soedjatmoko *et. al.* eds., *An Introduction to Indonesian Historiography*, Ithaca, Cornell University Press, hlm. 47-73.
- ___ tt. "Sailendrawangsa dan Isanawangsa", naskah.
- ___ 1982. "Aneka Catatan Epigrafi dan Sejarah Kuna Indonesia", *Majalah Arkeologi*, Th. V, No. 1-2, hlm. 15-38.
- Casparis, J. G. de 1950. *Prasasti Indonesia*, I, Bandung, A. C. Nix & Co.
- ___ 1956. *Prasasti Indonesia*, II, Bandung, Masa Baru.
- ___ 1958. "Short Inscriptions from Tjandi Plaosan Lor", *Berita Dinas Purbakala*, No. 4, Djakarta, Dinas Purbakala.
- Djoko Dwiyanto 1985. "Pertemuan Beberapa Prasasti Baru Sebagai Sumbangan Bagi Historiografi Indonesia", Makalah Seminar Sejarah Nasional IV di Yogyakarta.
- ___ 1986. "Pengamatan Terhadap Data Kesejarahan Dari Prasasti Wanua Tengah III Tahun 908 M.", *Pertemuan Ilmiah Arkeologi IV*, Buku IIa, Jakarta, hlm. 92-110.
- Hasan Djafar 1985. "Prasasti dan Historiografi", Makalah Seminar Sejarah Nasional IV di Yogyakarta.
- Jones, A. M. B. 1984. *Early Tenth Century Java from the Inscriptions: A Study of Economic, Social and Administrative Conditions in the First Quarter of the Century*, Dordrecht, Foris.
- Kusen 1984. "Temuan Baru dari Temanggung: Prasasti Raja Balitung 830 Saka", *Kompas*, Minggu, 6 Mei 1984.
- ___ 1986. "Parit Keliling Candi Plaosan Lor", *Pertemuan Ilmiah Arkeologi IV*, Buku IIb, Jakarta, hlm. 397-412.
- ___ 1988. "Prasasti Wanua Tengah III 830 Saka. Studi Tentang Latar Belakang Perubahan Status Sawah di Wanua Tengah Sejak Rake Panangkaran Sampai Rake Watukura Dyah Balitung", Makalah dalam Kegiatan Ilmiah Arkeologi IAAI Komisariat DIY-Jawa Tengah di Yogyakarta.
- ___ 1989. "Faktor-faktor Penyebab Terjadinya Perubahan Status Sawah di Wanua Tengah Dalam Masa Pemerintahan Raja-raja Mataram Kuna Abad 8-10", *Laporan Penelitian Fakultas Sastra UGM*.
- Liebert, Gosta 1976. *Iconographic Doctionary of the Indian Religion*, Leiden, Brill.
- Machi Suhadi dan M.M. Soekarto 1986. "Laporan Penelitian Epigrafi, Jawa Tengah", *Berita Penelitian Arkeologi*, No. 37, Jakarta, Pusat Penelitian Arkeologi Nasional.
- OJO: *Oud Javaansche Oorkonden, Nagelaten Transcripties van wijlen Dr. J. L. A. Brandes, Uitgegeven door Dr. N. J. Krom*, (VBG IX), 1913, 's-Gravenhage, Martinus-Nijhoff.
- Soekmono 1965. "Archaeology and Indonesian History", dalam Soedjatmoko *et. al.* eds., *An Introduction to Indonesian Historiography*, Ithaca, Cornell University Press, hlm. 36-46.
- Suhamir 1950. "Verslag van de werkzaamheden van de voormalige Bouwkundige Afdeling van de Oudheidkundige Dienst van 8 Maart 1942 tot 19 December 1948", *Oudheidkundig Verslag 1948*, Bandung, A. C. Nix & Co., hlm. 20-41.
- Zoetmulder, P. J. 1982. *Old Javanese-English Dictionary*, 's-Gravenhage, Martinus-Nijhoff.